第３章
現役舎生・関係の方々の声



目　次

3-1 概説編 93
2023-2026 の舎について　米倉　敬宏（農学部、2023 年入舎） 93
生活の様子　那須 清崇（公共政策大学院、2025 年入舎） 95

3-2 活動編 98
早天祈祷会　Theodorus J. Wijaya（工学系研究科、2019 年入舎） 98
聖書研究会　Shen Jie（工学系研究科、2025 年入舎） 99
総会　石井　蓮（農学生命科学研究科、2022 年入舎） 100
日直・掃除　H.K.（工学部、2025 年入舎） 101
食事　米倉　敬宏（農学部、2023 年入舎） 102
会計　白川　裕都（経済学部、2024 年入舎） 103
修養会　D.Y.（新領域創成科学研究科、2023 年入舎） 104
駒場祭　米倉　敬宏（農学部、2023 年入舎） 105

3-3 場所編 107
礼拝堂　白川　裕都（経済学部、2024 年入舎） 107
食堂　Esther O.（公共政策大学院、2025 年入舎） 108
厨房　太田　萌（情報理工学系研究科、2024 年入舎） 110
喫煙所　石井　蓮（農学生命科学研究科、2022 年入舎） 111
OB 談話室　Tavana Alireza （工学系研究科、2024 年入舎） 112
お風呂　ブディオノ・クリスチャン・ミレニュー（工学系研究科、2021 年入舎） 113
廊下　関口　玲（文学部、2025 年入舎） 114
三階談話室　D.Y.（新領域創成科学研究科、2023 年入舎） 115
舎生部屋　鎌田　将（人文社会系研究科、2025 年入舎） 117
卓球室　桐生　有喜（教養学部、2024 年入舎） 118
図書室　神野　和磨（理学系研究科、2025 年入舎） 119
客室　W.H.（学際情報学府、2023 年入舎） 120
3 階・4 階ベランダ　M.M.（経済学研究科、2025 年入舎） 121
祈祷室　崔　民赫（法学政治学研究科、2021 年入舎） 122

3-4 関係の方々の声 123
東大 YMCA 事務局の変遷　明神 恵子　永田 智子（事務局） 123
東大 YMCA 事務局回想　桃井明男 124
調理師の声　小幡 公雄（調理師） 126

3-1 概説編

2023-2026 の舎について

米倉　敬宏（農学部、2023 年入舎）



現在学生主事を務めております米倉と申します。2023年5月から舎にてお世話になっております。現舎生を代表しましてここ3年弱の舎につきまして簡単ではありますが記させて頂きます。

私が入舎した 2023 年は、新型コロナウイルスの影響からようやく回復しつつあるような印象でした。依然として入舎面接のオンライン実施や食堂へのアクリル板の設置等はありましたが、入舎少し前に参加した歓迎会は、対面で行われ学生らしい陽気に満ち溢れていました。それから 3 年経った現在、コロナウイルスの影響の跡は微塵もなく、舎生を隔てるものは部屋の扉しかありません。また、舎生は専攻、年齢、国籍、性別などにおいて様々に異なる背景を持ち、同質的になりがちな大学における集団の中で、稀有な豊かさを見せているように思います。近年は院生が大半を占めていますが、そのこともあってか、しばしばみられる「密な」学生寮とは少し異なり、適度な距離感で舎生同士関わっているようにも感じられます。

このように、凪の状態とも思える現在の寄宿舎ですが、それまでの 3 年の間には大小様々な風が吹いていました。まず、常に存在する問題として舎生数の減少がありました。2026 年 3 月現在、舎生数は 20 名にまで増加しましたが、2024 年度までは 15 名前後と比較的少数であり、それが故の問題が多々ありました。一番は事業部をはじめとする寄宿舎運営の困難化で、一人当たりの負担が重くなっていることは否定できない状況でした。例えば、総務部・文共部・企画部・聖研部に分かれる事業部の各部署では少人数でこれまでと同様の仕事を行う必要があり、必然的に一人当たりの仕事量が増加せざるを得ませんでした。このような文脈で、事業部の統合の話が出てきましたが、運用上の難しさや、幸運にも舎生数が 2025 年度以降増加したことで、この問題は一旦据え置きになっています。いずれにせよ舎生数の定員割れの状況は変わらず継続しているため、理事会とも連携しつつ、現舎生の方でも独自に舎生増加のための様々な施策を検討、実施中です。

舎生数の減少の他に、舎生の心身の不調への対応という課題もありました。中でも心の問題を抱える舎生が少なくなく、そもそも学生間でサポートしていけるのか、できるとしてどのように行うのか、ということに当事者として直面することが幾度かありました。現在は、事務局や理事会とのコミュニケーションを十分に取り、青年会全体としてサポートしていく、という

ような方向で進んでいるように理解しています。

さらに、寄宿舎の安全に関わる出来事として、2023 年に部外者の無断立入が、2025 年には東大前駅での傷害事件の発生がありました。これらを重く受けとめ、施錠の徹底化や玄関扉のオートロック化の理事会への要望などを行いました。オートロック化に関しては、現在理事会を中心として進行中のリノベーション計画において実施予定です。

このような向かい風ともとれる状況の中でも、私たち舎生は時には総会で熱い議論を交わし、時には何気ない会話を重ねながら少しずつ前進してきたように思います。振り返るとこの 3 年間だけを見てみても様々な改革や変更がありました。大きなこととしては、入舎面接における選考基準の設定(2024 年 1 月)、会計制度の変更(2025〜2026、活動篇に一部詳細を記載)、舎生間の連絡手段としての Discord の導入(2025 年 7 月)などです。他にも、総会決議をまとめて掲載する「決議集」の作成、新たな生活委員としての「食事係」の設置、ペット飼育に関するルール整備等々、様々挙げられます。また、新しい試みとして駒場祭への出展も行いました(活動篇に詳細を記載)。2026 年度には 5 月祭にも出展する予定です。

最後に寄宿舎の活動の核をなす早天祈祷会(早祷)について記させて頂きたいと思います。この 3 年、基本的には平日は朝 7 時、土曜は 8 時から早祷を行ってきました。その中で、課題となってきたのが主に舎生の参加率でした。先輩方とお話をすると、度々早祷の参加率の低さが話題となることから、長年存在している問題であるようですが、この 3 年間も波があるとはいえ、多いとは言えない参加率の状態が続いています。このため、参加率を上げるための方策を様々に検討、実施してきました。2024 年 6 月にはそれまで週 4 回だったのを 2 回に削減し、かつ不参加者へのペナルティ方式を一ヶ月間試行しました。しかしながら、早祷の参加は舎生の義務とはいえ信仰の問題もあるため強制するものではない、という意見などもあり、ペナルティ方式は中止、回数も早祷の存在感の希薄化への懸念のため 2024 年 11 月に週 3 回に再度変更しました。また、時間帯の影響を考慮し、2025 年 8 月には平日も 8 時からに変更しました。他にも夕祷の実施や早祷以外の活動でキリスト教への興味関心を深めるための早祷以外の活動(近隣の教会における教会問答への複数名での参加、QT(ディボーション)の実施など)なども行っています。近年はクリスチャンの割合が減少傾向にあり、寄宿舎全体としてのキリスト教と向き合う温度感も変化しつつありますが、引き続き早祷のあり方の模索は続いていくと思います。

今回、新舎 50 周年という歴史的節目に立ち会い、記念誌の執筆にも携わらせて頂けたことに深い喜びを感じております。舎生の方からは、この概説編に加え、活動編と場所編に分けて寄稿をさせていただきました。活動はもちろん、舎のそれぞれの場所にも各々に特有の思い出や記憶が刻まれると思います。是非、読み手の方々それぞれの思い出の活動や場所の寄稿をお読み下さり楽しんで頂けましたらこの上ない喜びです。

生活の様子

那須清崇（公共政策大学院、2025 年入舎）

本稿では、新舎生の目から見た現在の東大 YMCA について述べようと思います。

私は大学院進学のタイミングで早稲田大学から東大に移るとともに、東大 YMCA に入舎しました。ですので入舎時点では、東大に一人も友人がおらずたいへん心細く思っていました。それが今では気心の知れた寄宿舎の仲間に恵まれ、この場所を家として心安らかに充実した日々を送っています。一人暮らしをしていた頃と比べると、心身ともに遥かに満たされていることを実感します。わずか半年強でこのように安らかな環境に恵まれたのはなぜでしょうか。私はそれは、人と接する機会の多さに依るものだと考えています。

私は大学進学を期に上京して以来、学部 4 年間は一人暮らしをしていました。あの頃と比べると、いまの寄宿舎生活は精神的に素晴らしく豊かなものです。そしてその根底には、他の舎生との交流があると考えています。

寄宿舎生活では、常に誰かがそばにいます。食堂に行けばいつも誰かがいて賑やかな笑い声が聞こえてきます。洗面所でふとすれ違った舎生と少しだけ言葉を交わして、元気を貰ったことも何度もあります。ひとり暮らしをしていた頃は、誰かと会いたければ大学まで行くかわざわざ約束をせねばなりませんでした。いつでも気軽に顔を合わせられる距離に誰かがいるという環境は、精神的に大きな支えとなっています。嬉しいときも辛いときも、ひとが側にいるということは大きな励みになるものです。

また、早祷や木曜集会のような東大 YMCA ならではの行事も大切な要素です。早祷では朝から讃美歌を歌い、総会では寄宿舎の運営について議論を交わします。いずれも、ひとり暮らしをしていた頃には考えられなかった素晴らしい機会です。これらの行事を通して生活が引き締まるとともに、他では得難い人生の学びを数多く得られています。

私は東大 YMCA での寄宿舎生活を通して、ともに暮らす隣人というこれまでにない関係として舎生たちと関わり、人間関係や社会について多くのことを考え学んできました。拙いものではありますが、ここからは私が得た学びについて述べさせていただこうと思います。

私が入舎した際の作文には、次のようなことが書いてありました。

「私は幸いにして恵まれた環境で生まれ育ち、個人として生きていくうえでは自分の原状に深く満足しています。ですがこれから社会に出るにあたり、自分だけではなく他者のことを考え、人とのかかわりの中で生きていくためには今の自分にはまだまだ至らないところが多々あると考えています。東大 YMCA での寄宿舎生活のなかでキリスト教の精神を実践することで、よい人間になりたいと思います」

この通り、私は人との関わりの中で生きることのヒントを求めて東大 YMCA に入りました。キリスト教についても YMCA についても何も知らなかった私は、組織の中で個人が生きていくための「規律」のようなものを想像し、それが東大 YMCA にあると考えていました。今に

して思えば、信仰というものに対して過度に潔癖なイメージを持っていたのかも知れません。

入舎した直後の私がまず感じたことは、正直に言ってしまえば「思っていたよりゆるいな」ということでした。私の乏しい宗教知識と過大な想像力は、まるで修道院のような規律と静謐さで満たされた生活を無意識に想像していたようです。これから一緒に暮らしていく舎生たちが、世俗を生きるなま身の人間、いわばキリスト者であると同時に生活者であるということに想像が及んでいなかったのです。

入舎してしばらくは驚きの連続でした。舎生たちは私の想像よりもずっと自然体で、リラックスして生活していました。もちろん共同生活を維持するための最低限の約束事はありますが、私が想像していたような生活を引き締める厳しい規律のようなものはどこにも見当たりませんでした。

その代わりに、そこには「思いやり」がありました。汚れに気づいたら誰に言われずとも自ら進んで掃除をすること、疲れている舎生がいれば声をかけて励ますこと。誰もが自分なりの思いやりを持って行動し、その結果共同生活が円滑に回っている。

そして、思いやりは自己犠牲ともまた違うものでした。いつも人のことを気にかけて元気づけている人が共用品の扱いでうっかりミスが多かったり、誰に言われずとも進んで掃除をしている人が時間には少しルーズだったり。誰もが自然体で生きていて、自分の美点を発揮しながら、自分の欠点を誰かに助けられていました。

それでよいのだ、と気づけたことが私がここで得た最大の学びです。欠点のない人間などいません。誰もが自分では気づかないうちに欠点を持っていて、誰かに助けられなければ生きていくことはできません。だからこそ、お互いに信頼と利他心を持っている集団であれば、誰かの美点が誰かの欠点を補うことができます。規律と自制で常に他者に与え続けるのではなく、多様な他者どうしがごく自然体で生きていることがそれだけで助け合いになる。そのような、人同士の関係性の理想のかたちの一端をこの寄宿舎で見ることができました。

もちろんこれは簡単なことではありません。集団の中で特定の人に負担が偏ってしまうのはよくあることですし、得てして心優しくよく気づく人がそういう損な役回りになってしまうものです。この寄宿舎での生活も常に順風満帆なわけではなく、時には日付が変わるまで総会が続くほどの激論が必要になることもあります。

誰かが一方的に損をするのではなく、ギブアンドテイクの輪が廻るようなよい集団になるためにはどうしたらよいか。その核心は、「信頼と利他心」で集団が結ばれていることだと思います。この集団は自分が与えた分だけ返してくれる。いや、たとえ返ってこなくてもこの人たちのためなら何かをしてあげたい。全員がそう確信できるだけの強固な信頼関係があることが、人と人とがよい関係を結ぶために欠かせないものなのだと気づきました。そしてそれこそが、キリスト者の「隣人愛」なのではないかと考えています。

このように、日々の寄宿舎生活での舎生間の関わりを通して、人としてのあり方や信仰生活について非常に多くを考え学ぶ機会を得ました。ここで学んだことは、日々の生活のたくさん

の思い出とともに、きっと私の生涯の財産となるはずです。

　このような素晴らしい環境に巡り会えたことに感謝するとともに、この場所がよりよい共同体となることに私も貢献できるよう努めていこうと思います。





2025 年度 クリスマス祝会にて

3-2 活動編

早天祈祷会



Theodorus J. Wijaya（工学系研究科、2019 年入舎）

祈祷会は、三階談話室において、週に三回、舎生が司会を務める当番制で行われています。祈祷会は讃美歌から始まります。讃美歌は、古くから愛されてきたヒムプレーヤー（自動演奏機）によって流され、舎生が歌います。その後、司会による祈祷に入ります。祈祷の内容には原則となる決まりはありませんが、「祈りボード」に記された一般祈願と個人祈願を用います。一般祈願の欄には、詩編の一部をはじめ、寄宿舎やその関係者、日本の教会のための祈りが記されています。個人祈願の欄には、舎生が隣人のために祈りたい課題を自由に記載することができます。例えば、治療のための祈り、就職活動や論文執筆に関する祈りなどが書かれています。

祈願の後、聖書朗読に入ります。司会は、分かち合いたいメッセージに合わせて自由に聖書箇所を選ぶことができますが、特に指定がない場合は、参加者によって旧約聖書と新約聖書を交互に、数節ずつ朗読します。

聖書朗読の後には黙想の時間が設けられます。この時間では、神のみ言葉をゆっくりと味わい、心に留まった言葉に再び向き合い、観想することができます。

数分間の黙想の後、司会による分かち合いに入ります。使徒パウロがローマの信徒への手紙で記したように、「あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです。」（ローマ 1 章 12 節、新共同訳）。司会は、自身の生活の中で気づいた恵み、経験した成功と失敗、喜びや悲しみを分かち合えます。これを通して舎生同士の絆が深められ、互いの信仰を励まし合うことにもつながります。

分かち合いの後、舎生は再び頌栄を歌い、主の祈りを共に唱えます。その後の数分間には、参加者からの質問やコメントの時間も設けられています。時に、この短い時間が大きな気づきをもたらすこともあります。

なお、場合によっては、早天祈祷会の形式が変更されることもあります。月末には「恵み会」となり、聖書朗読は詩編を用い、司会による分かち合いの代わりに、参加者それぞれが一か月の歩みの中で体験した恵みを分かち合います。

このように、早天祈祷会は、単なる集会ではなく、祈りのひとときであり、多忙な学生生活の中で立ち止まり、思いを巡らし、心を改めるための招きの場です。それは、神の前に生きる私たちに託された、尊く大切な務めです。

聖書研究会

Shen Jie（工学系研究科、2025 年入舎）

本寄宿舎では、毎月一回、定期的に聖書研究会を開催している。開催日は舎生総会にて協議の上決定され、各回につき二名の舎生が担当者となり、外部より講師をお招きして行われる。

研究会に先立ち、担当舎生は当月に読む聖書箇所を丁寧に読み込み、内容に関する疑問点や考察を整理する。それらは他の舎生から寄せられた問いとあわせてまとめられ、事前に講師へ共有される。この準備過程を通じて、舎生一人ひとりが主体的に聖書と向き合う機会が設けられている。

研究会当日には、講師によるテーマ講演が行われるとともに、舎生からの問いに対する応答や意見交換の時間が設けられる。たとえば、2025 年 10 月以降は長谷川修一教授を講師としてお迎えし、考古学の視点から聖書の記述と、現在のパレスチナ地域における考古学的知見との関係についてご講義いただいている。加えて、聖書研究をめぐる近年の学際的な研究動向にも触れながら、多様な学問分野における解釈や議論を紹介してくださっている。これにより、舎生は日常の聖書読解を、より広い視野と多角的な視点から捉えることが可能となり、相互の思想的対話もいっそう深められている。

聖書研究会は、毎日の早祷に加えて、舎生が聖書およびキリスト教についてより深く学ぶための重要な定期活動である。今後も継続的に実施し、聖書研究のさまざまな分野で活躍する研究者を招きながら、舎生の多元的な理解と活発な交流を促していく予定である。本研究会は、寄宿舎生活における学びと対話を支える、かけがえのない機会の一つとなっている。



早天祈祷会・聖書研究会で現在も使用している歴史あるヒムプレイヤー

総会



石井　蓮（農学生命科学研究科、2022 年入舎）

この寄宿舎に入って初めての総会に参加する前、身構えてしまうような話をよく耳にした。曰く、総会では張り詰めた雰囲気の中白熱した議論が行われ、深夜遅くまで終わることはない、というものだった。実際に参加してみると恐れるようなものではないことはわかった。基本的には全員がお互いへの敬意を持って議論しつつ、中身はしっかりと濃密で有意義なものであり、生活の根幹に関わるルール設計やトラブル対処が行われていく場であった。

みんなで協力して物事を決める。言葉で言うのは簡単だが、本当に難しかったこともある。前提として、舎生間で生活に関する考えや常識には大きな隔たりがあることが多い。ある人にとっては当然なことが、ある人にとっては許せないのが常だ。片方にとって譲歩可能なことである場合はまだ良い。だがどうしても双方が譲れないようなこともある。それに対し、全会一致の決議を持って何らかのルール整備をしようとする行為は困難を極める。そこには、いつだって簡単な解決策など存在しない。地道に、誠意と互いを思いやる心を持ちつつ、自他の主張を吟味して考え続けることしかできないのだ。

無論上記のプロセスが人間関係のトラブルにつながったこともある。それでも、人と人が生活していく上で必要なものだ。もっと一般化してもいい。これは、人が他者と対話して生きていく上で絶対に必要なプロセスであることを私は確信している。当然社会に出てから仕事をする上でも、何度もきっと、似た苦しい議論を経験するはずだ。私は、それを生活の場の中で濃密な形で経験できることを極めて価値のことであると思うとともに、この難題に挑戦した仲間との間に芽生える連帯もまた得難い宝だと感じる。

日直・掃除

H. K.（工学部、2025 年入舎）

東大 YMCA 寄宿舎での日直や掃除といった当番活動は、単なる作業ではありません。それは、私に「一人の生活者」としての自覚と、組織の一員としての基礎を教えてくれる大切な時間です。

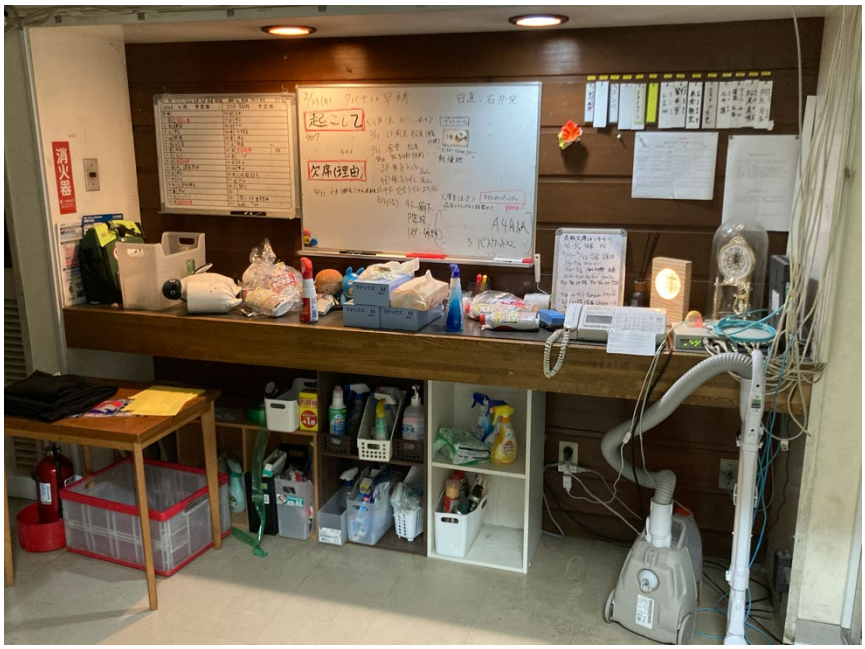
実家にいた頃、ゴミ捨てや皿洗いは当たり前に親がやってくれるものでした。しかし、舎で自ら手を動かすようになり、分別の仕方を覚え、汚れを落とす中で、日々の生活がいかに多くの手間によって維持されているのかを初めて実感しました。これは、一人の人間として生きていくための「自立」に向けた、重要な第一歩だと感じています。

また、これらの当番は「社会に出る前のチームワークの練習」という側面も持っています。限られた人数の中で掃除を分担し、時には「どうしても外せない予定があるから代わってほしい」とお願いしたり、逆に誰かのピンチをフォローしたり。単に仲良く過ごすだけでなく、組織の中で自分の役割を見つめ直し、責任を果たすことの難しさと大切さを学んでいます。

自治である以上、当番の進め方一つをとっても話し合いが欠かせません。時に意見がぶつかり、本音で議論することもありますが、そうして自分たちの手で生活を回してきたからこそ、一生の宝物と言える深い絆が生まれるのだと確信しています。

こうした「お互い様」の精神は、単に効率がいいからあるのではありません。「助けてもらうありがたさ」と「誰かの役に立てる喜び」の両方を知ることで、寄宿舎はただの建物ではなく、しんどい時に弱音を吐いても大丈夫な温かい場所になっていきます。

自分のやりたいように過ごせる一人暮らしは気楽かもしれませんが、誰かと支え合い、認め合いながら生活を作るこの時間は、これから社会に出ていく私たちにとって、何物にも代えがたい「心の栄養」になっています。



食事

米倉　敬宏（農学部、2023 年入舎）



舎生にとって、舎の食事は、何よりも生存を担保する基本的活動であり、まさに、日ごとの糧となっている。まかないさんによって提供される食事は質と量共にこれ以上ないもので、献立は毎日異なる彩りを見せ、決して飽きることがない。また、舎生同士余り物や残り物をシェアし合うこともよくあり、最近は何種類ものお茶を舎にいながらにして楽しむことができる。さらには舎生が一丸となって食事を作る「ホットミール」という不定期開催の行事では、調理の過程まで共に楽しむこともでき、食環境は複合的な豊かさを見せる。

一方で、舎において食事は時に生活環境に緊張をもたらす材料となる。食事は重要であるが故にそれに関連する問題は多くの場合切実にならざるを得ない。例えば難解な未解決問題として食堂にある共用の冷蔵庫の管理問題がある。食堂の冷蔵庫は舎の中でもカオスで無秩序な空間の代表として知られているが、そこの食品・食材の処分に関しては、「明らかに腐敗」しているということをほとんど唯一の指標としているために、しばしばゾンビ化した食べ物たちが腐敗菌を撒き散らしながら我が物顔で居座ることになる。秩序を取り戻そうとするまかないさんをはじめとする心ある人たちの働きによって冷蔵庫内のエントロピーはなんとか過剰増大せず済んでいるが、未だ安定化には至っていない。また別の難問として「ガスコンロ問題」がある。舎は文化遺産並みに古いガスコンロを依然として使用しているが、それゆえ消し忘れ防止装置などの安全設備が皆無であり、舎生による不適切な使用は危険を招きうるという問題がある。IH の導入や使用時間の制限など、改革は進みつつあるが、未だ手探りの状態であり、今後の改善が望まれる。



このような緊張の種をはらみつつも、食事は舎の中心的な活動であり続けてきた。普段はバラバラに生活している舎生たちも、食事時には顔を合わせ、何気ない雑談から本格的な討論まで多種多様な会話が花開く。これからも、食事は舎生たちを結びつける役割を果たし続けていくだろう。

会計

白川　裕都（経済学部、2024 年入舎）



2025 年 9–11 月期に舎生会計を担当いたしました白川と申します。平素より、東大 Y の活動を温かく見守り、お力添えを賜っております OB/OG の皆さまに、心より御礼申し上げます。

このたび、舎費の運用に関して、舎生側と事務局側での二元管理に起因する不都合や非効率が顕在化してきたことを踏まえ、舎費は事務局へ直接納入する方式へ変更いたしました。あわせて、舎費の納入状況等については事務局より情報共有を受け、従来どおり舎生会計が総会にて報告する運用としております。なお、今後の一元的な舎費管理においても、舎費納入の周知・催促は舎生会計が主体的に担うこととしており、舎としての自治性は引き続き確保されるものと考えております。

また、そもそも舎費そのものは舎生が任意に使途を決められる資金ではありませんが、二元管理のもとでは、舎費口座に臨償積立金・年会費・入舎積立金等が混在しやすく、資金区分が分かりにくくなる傾向にありました。その結果、舎生の意思決定により運用している臨償積立金についても、実務上の利活用が難しくなる場面が見られました。今回、舎生口座の資金を整理し、「舎生が運用・利活用できる資金」と「性質の異なる資金」を明確に峻別する方向で整えたことは、舎生会計システムの本旨である自治性を損なうのではなく、むしろシステムとしての透明性と運用可能性を高めるものだと認識しております。

加えて、2018 年より運用されている Google スプレッドシートによる舎費・関連資金の管理について、複数の入力・集計上のエラーが確認されたため、整合性を取るための入力内容の軽微な修正を行いました。

舎生の自治的な積立として、舎費等とは区分して管理している臨償積立金については、今年に入って共用備品の整備等により日常的な資金需要が高まりつつあります。こうした状況を踏まえ、より日常的に運用・利用しやすい形へ整備を進めました。一方で、年間の使用上限額、支出に関する舎生間の意思決定プロセス、臨償積立金の望ましい使途の整理など、ルールとして明文化されていない点も残っております。他大学 Y では年度予算をあらかじめ策定し、その範囲で運用している例があるとも伺っております。東大 Y としての実情に即した制度設計の可能性も含め、今後、舎生の皆さんと継続して議論を深めてまいりたいと考えております。

最後に、会計システムや資金運用に関して知見をお持ちの OB/OG の皆さまの中で、ご助言・ご協力を賜れる方がいらっしゃいましたら、ぜひお声がけいただけますと幸いです。舎の将来に向け、持続的で透明性の高い運用体制を築いていくため、何卒よろしくお願い申し上げます。

修養会

D.Y.（新領域創成科学研究科、2023 年入舎）

コロナ禍で中断していた修養会は二年前から再開され、昨年度の修養会では日帰りで鎌倉を訪れることになった。二月一六日の朝、総勢八人で寄宿舎を出発し、最初の目的地である鎌倉雪ノ下教会を目指した。鎌倉というと大した遠出でもないが、私はまるで初めての遠足に向かう小学生のように、ほんの少し、ドキドキしていた。当時、文共部員だった私は、中心になって会を取り仕切るという慣れない役回りを担っていた。舎の皆とそろって外出する機会も珍しく、どんな会になるか、期待よりも先に緊張していたのである。

目的地に到着して、まず想定外だったことには、雪ノ下教会がカトリックとプロテスタントの二つあったのだ。当初の計画では、プロテスタント教会を訪れる予定だったのだが、皆で相談した結果、カトリックの雪ノ下教会のミサに出席することになった。

礼拝堂に足を踏み入れると、天井は高く、オルガンの音色がよく響きわたり、壁際の窓からは柔らかな光が差し込んでいる。その静謐な空気に包まれ、自然と心が澄んでいくようであった。普段はプロテスタントの教会に通っている私にとって、カトリックのミサはなじみの薄いものであり、聖体拝領や典礼も、周りの人の見様見真似であったが、その一つ一つが非常に新鮮な体験であった。

ミサの後は皆で海鮮丼を食べたり、北鎌倉を散策したりと鎌倉の町を楽しんだ。旅の締めくくりには由比ガ浜を訪れた。幾たびもの撮り直しの末に、人文字 YMCA をなんとかカメラに収めたのだが、C の文字担当の米倉兄が、跳びすぎて疲れてしまい、桐生兄に途中で選手交代したのは、良い思い出である。

振り返ると、出発前の私の心配はすべて杞憂に終わった。入舎したばかりの舎生も、これから卒業して社会に出ていく舎生も、皆で相談しつつ作り上げたこの修養会で仲が深まり、心に残る、恵みにあふれた時間であった。





2024 年度修養会の様子

駒場祭

米倉　敬宏（農学部、2023 年入舎）



2025 年の 11 月下旬、イチョウによってキャンパスが黄色く彩られ、独特に香りづけられた季節に東大 YMCA は駒場という若者の街に上陸した。「年寄り」が多い現舎生の大半にとって、血気盛んなその地は微妙に居心地が悪かったけれども、勇気を出して訪問であった。そう、なんのことはない、駒場祭への出展である。しかしこれは東大 Y の有史上おそらく初めての試みであり、決して容易な挑戦ではなかった。そもそもの出展の主眼は寄宿舎の宣伝にあった。昨年から今年にかけての新舎生は十人という稀にみる豊作であったが、水物である応募者の人数のことであるから油断はできない。波にのってきた舎をより軌道にのせるための絶好の機会として駒場祭は捉えられたのだった。出展内容は、ある舎生が「東大 YuMmyChA 亭」という天才的な企画名を思いついたことで、ヤムチャに決定した。

蒸し餃子と烏龍茶を提供することとなったが、神は私たちに予想以上の試練をお与えになった。悲劇の第一幕は、二人いる担当者(私はその一人)が駒場祭前後で多忙であるということだった。私は学園祭前日の金曜日が卒業論文締め切りという比較的まだ「幸運な」状況であったが、もう一人は公務員試験が土日に位置し、物理的に参加が不可能になった。第二幕は駒場祭の日程が 50 周年記念式典と被ったことであった。これにより、3 日間の駒場祭のうち 1 日出れないことが確定した。終幕にして最後のトドメとなったのは、他でもない、当日の売れ行きであった。駒場祭の屋台は、五月祭と比べ過酷なことで知られているが、それは想像以上であった。比較的良い立地であるはずなのだが人々は無情にも一瞥をくれるのみでただただ通り過ぎていった。売れ残った大量の餃子は、舎生の日用の糧となった。唯一救いであったのは、舎に関心を持ってくれる方々が思ったよりいてくださったことである。中には、応募を真剣に検討してくれそうな方もいらっしゃった。因果関係は分からないが、駒場祭の直後に数人の見学申し込みがあった。

今回の反省を踏まえ、五月祭も含む来年度以降の学園祭における対策が検討された。冊子の配布や物品販売など、食事提供に限定されない出展の可能性も提示された。私は今年度で舎を去る身であるので今後は見守るしかできないけれども、これからも舎を牽引していく前途洋々な学生たちの柔軟でアイデアに満ちた出展に期待しているところだ。東大 YMCA の学園祭での冒険はまだ始まったばかりである。To be continued...



駒場祭にて出展した東大 YuMmyChA 亭



舎生総出で、食堂にて事前準備（折り鶴）をしている様子



デザイン：W.H.さん（学際情報学府、2023 年入舎）

3-3 場所編

礼拝堂



白川　裕都（経済学部、2024 年入舎）

礼拝堂は、総会や記念礼拝といった節目の場でありながら、日常の中にも静かに息づいている空間だと思います。普段は総会で用いられ、時折ピアノの音が響き、土日には聖書研究会や合唱サークルなど外部団体の利用もあり、用途は多様ですが、そのいずれにおいても、場の落ち着きが損なわれることはありません。

私自身も、勉強のためにこの場所を使うことがあります。テスト前に思考が行き詰まったとき、礼拝堂の静けさは自然と集中を取り戻させてくれます。窓の向こうに見える文京学院大学のビル越しの空も印象的で、時間の流れが一度緩むような感覚があります。

この空間の特徴の一つは、廊下の小窓や階段越しに伝わる「気配」だと感じています。中を覗かなくても、誰かがいることが分かる。ピアノの音から、演奏している人が自然と思い浮かぶこともあります。完全に閉じられない構造が、他者の存在を意識の周縁に留め、過度な緊張を生まずに集中を支えている。その在り方は、寄宿舎生活らしい距離感を象徴しているように思います。

近年はオンライン配信の機会も増え、今年度は音響設備を一部整えました。ミキサー型のオーディオインターフェースやコンデンサーマイクを導入し、必要な範囲でケーブル類も更新しています。記念礼拝や講演会、会議や合唱の配信・記録が、以前より滞りなく行える環境が整いつつあります。



設備は少しずつ更新されても、礼拝堂が持つ空気感や景色は変わりません。今後ホワイトボードなどが加われば、研究や日々の関心事について自然に言葉を交わす場面も、より生まれやすくなるかもしれません。先輩方が大切にされてきたこの空間を、時代に即した形で丁寧に使い継いでいければと思います。

食堂

Esther O.（公共政策大学院、2025 年入舎）

Whenever I return back to the dorm, I'm greeted by a dark corridor and at the end of it, a warm glowing light behind frosted glass doors. Sometimes, its silent. Other times, I hear chatter and laughter flowing out from behind it. Sometimes, when I feel like I want some company, I pop in for a quick (or not so quick) chat. Other times, too tired from the day's activities, I plod upstairs, with the light comforting me, reminding me that I'm surrounded by a community.

Big cities can be isolating. Tokyo is no exception. But for me, the dorm has been a wonderful home, and the only one I've known in Tokyo in my short 3 months here. Most of my fondest memories of day-to-day life at the dorm have revolved around the 食堂. Many of my friendships with the other dorm students were formed around warm meals around the large dining table, reminiscent of one from a large family home. The presence of homecooked food provides the setting for good conversations, ranging from what happened in our days, the latest dorm events, complaining about exams and coursework and even discussions on politics, economics and public policy matters (although I study that, so maybe my experience is biased). As someone who takes some time to make friends, the repeated interactions with my dormmates in the 食堂 has given me the opportunity to forge friendships in my short time here; it's truly a space that makes the dormitory feel like a home away from home.

Of course, we must thank 小幡さん for the warm homecooked meals at both breakfast and dinner. As someone who has been a 留学生 in Europe for the past 4 years of my life, I've stayed in private accommodation the whole time. I've never had catered food. Every meal was a chore of having to think about what to cook, what ingredients to buy, when to buy it, washing and prepping the food, then at the end of it washing up after the meal. While I usually enjoy cooking, on top of my usual studies and during busy periods, it was a chore. Therefore, I'm grateful to come home to a lovingly prepared homecooked meal, with おかず to accompany it!

And while the 礼拝堂 is great for official meetings and big events, the 食堂 is my favourite place for the relaxed and fun events. My favourite memory has been the Christmas 礼拝 afterparty, where everyone could unwind, drink together and participate in a very fun Secret Santa gift exchange.

All in all, the 食堂 is a integral part of our dorm life here – I never know who I'll meet that day or what conversation we'll have, but the element of surprise adds to the excitement and enjoyability of communal living.



食堂にてクロスワードをする舎生



岩見さんがご飯を作ってくださった日



小幡さん



食堂にてスライド発表の練習をする様子



クリスマス会後 プレゼント交換の様子



小幡さん

厨房

太田　萌（情報理工学系研究科、2024 年入舎）



厨房といえば、一般的にはまかないの小幡さんの姿を思い出すのだろう。だが私にとって厨房は、寄宿舎の中で自分の部屋以外に、唯一無心になれる場所だった。

短い時で三時間、長い時には六時間ほど、深夜の厨房で一人、黙々とお菓子を作っていた。お菓子作りが好きだったわけではない。甘いものも、特別食べたいとは思っていなかった。ただ、忙しなく人の気配が途切れない寄宿舎生活の中で、頭を空っぽにするための行為が必要だった。

実家にいた頃、料理をした記憶はほとんどない。その後の一人暮らしでも、オーブンを持たないまま過ごした。寄宿舎に来て、立派なオーブンを見たとき、なぜかこれを使わなければもったいない気がして、パウンド型とハンドミキサー、レシピ本を一冊だけ買った。

消耗しやすい自分にとって、決まった量を計量し、混ぜ、こね、並べるという単純な作業だけをこなす時間は救いだった。数時間で終わらせるつもりが、気づけば朝になっていたことも一度や二度ではない。私が欲しかったのは完成したお菓子ではなく、プロセスであり、甘ったるい匂いが厨房に広がる頃には、もう興味を失っていることがほとんどだった。

大量にできたお菓子は、食堂の冷蔵庫に入れておけば、舎生によってすぐに消えていった。大人数のメリットである。作るプロセスを一人で楽しみ、成果物は自然と皆で共有されていく。その両立ができるのは、寄宿舎ならではのありがたい環境だった。

特に思い出深いのは、クリスマス会のプレゼント交換でもらった、ヘクセンハウスのキットを使って、6 時間ほどかけて大量のクッキーパーツを焼き、大掃除の後に皆でヘクセンハウスを組み立てたことである。食堂に置いておいたら、組み立て前にパーツの一部を舎生に食べられるというハプニングが起きたり、不器用すぎてハウスにならない問題があったり、みんなでチョコペンで落書きをしたり、存分に楽しんだ。



これからも、あのオーブンが舎生を陰ながら支えていくことを願っている。

喫煙所

石井　蓮（農学生命科学研究科、2022 年入舎）



現代人は忙しい。この東大 YMCA 寄宿舎の舎生とて例外ではない。学業に、バイトに、日々勤しんでいる。そんな中聖域として残された時間がある。それが喫煙所での一時である。タバコを吸う 5 分間、この時だけ日々の雑務から解放されて思索に耽ることができる。研究のこと、就職のこと、もっと大きな人生のこと。それをゆったりと考える時間をいつもこの場所は与えてくれる。

もちろん一人で過ごす時間だけではない、友人と共にタバコを吸う時間もまた得難いものである。普段食堂で話すのとはまた違った時間がそこでは流れている。公で話すのが躊躇われるような人の心の奥底の話を共有できるような、そんな不思議な場といえよう。普通の寄宿舎生活を過ごしているだけでは知り得なかった友人の一面を垣間見て、より親密な関係を築くことができたのだ。



近頃喫煙をめぐる世論は大変厳しい。公式マップから消えたもののまだ喫煙所の設置がある東京大学は有情なほうだ。東大 YMCA 寄宿舎に喫煙所があるのも本来不思議なことであり、一喫煙者としては極めて幸運なことといえよう。健康に対するタバコの害は否定すべくもなく、いずれはこの寄宿舎の喫煙所も消えるだろう。それでもその時間に他にない価値を見出す人間がいることをここに記した。

OB 談話室

Tavana Alireza （工学系研究科、2024 年入舎）



OB 談話室は、食堂の隣、廊下の突き当たりに位置する部屋である。入舎希望者が舎内見学の際、最初に案内される場所の一つであり、多くの場合、この部屋が寄宿舎の第一印象を形づくる。木製の壁や家具に囲まれた空間には、どこか懐かしさを感じさせる落ち着いた雰囲気が漂っている。部屋に置かれたピアノや、著名な卒舎生の写真は、この場所に品格と歴史の重みを添えている。また、来訪者の目を引く古いベルをはじめとするいくつかの調度品は、長い年月を経て受け継がれてきた寄宿舎の記憶を静かに物語っている。

この部屋は、月例の OB 会や聖書研究会などに利用されており、世代を越えた対話の場としての役割を担ってきた。近年では、英語によるスモールトークの集まりも行われており、教育、経済、哲学など、多様な分野のテーマについて自由に意見が交わされている。参加者それぞれが異なる視点を持ち寄ることで、新たな考え方に触れ、理解を深める機会となっている。

OB 談話室は、単なる部屋ではなく、対話を通じて好奇心を満たし、価値観を共有する場として、今も寄宿舎生活の中で大切な役割を果たしている。



お風呂

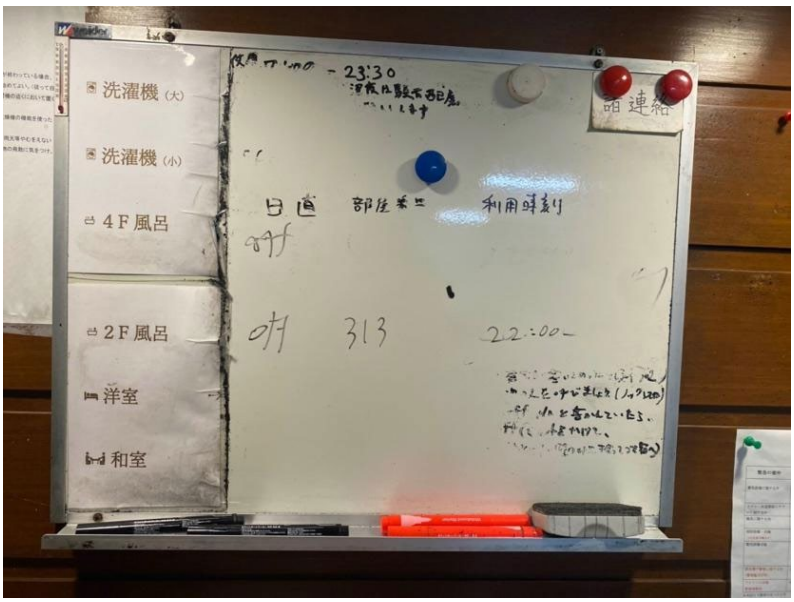


ブディオノ・クリスチャン・ミレニュー（工学系研究科、2021 年入舎）

東大 YMCA 寄宿舎のお風呂は 2 階と 4 階にあります。それぞれシャワー・バスタブ付きで、4 階のお風呂は学生の部屋に近いため入る時間帯が制限されていますが、2 階のお風呂はいつでも入っていいことになっています。また、2021 年ころから雑会計の廃止とともに 2 階お風呂のお湯の利用料金もなしになりました。

そんなお風呂ですが、建物の中で自分の部屋以外で唯一「一人でゆったりできる空間」だと私は思います。個人の時間が欲しい時、自分の部屋にいるかお風呂に入ります。お風呂だと、シャワーを浴びながら歌を歌うことができますので、ストレス発散にはとてもいいと個人的に思います。

こんな大切なお風呂なので、もちろん掃除も学生でしっかり行っております。いつもみんなが快適に使うことができるように、いつも私たちの大切な場所になるように、これまでも、これからも。



お風呂の利用時に使用するホワイトボード。部屋番号と利用時刻を記入する。

廊下

関口　玲（文学部、2025 年入舎）



廊下と階段は各部屋を移動するための通り道だから、道である以上それ自体のためにそこに赴くということは基本的になく、機能としては媒介者の地位に留まる。したがって、そこで舎生との間に何かが起きるのだとすれば、それはたぶんに偶然の産物である。多くの場合ふたりは目的地を異にしており、すれ違いのつかの間に交流が生じる。軽く会釈をして通りすぎることもあれば、会話に花が咲いてしばらくそこに立ち止まることもある。外出先で知り合いに出くわすと、私は面食らって、うまく話せずに別れてしまいがちなのだが、寄宿舎のなかでは誰かと遭遇することを当然のこととするモードにあるから、割とスムーズに会話ができる。この点、外の道路と建物内にある廊下との違いかもしれない。

私の部屋は階段とお手洗いから比較的近い距離にある。扉が薄いのもあって、部屋にいても外の往来がよく聞こえる。各舎生の生態をある程度把握できるようになると、誰がいま通っているのか、声を聞かずともだいたい予想できる。ホワイトボードに文字を書く音を聞いて、あ、いまのは○○さんかなとか想像する。最近は食堂の扉の建付けが悪くなっていて、開閉のたびに指笛のような音が鳴り響く。その頻度が多いと食堂の賑やかな様を想像し、気分がよければ、自分もそろそろご飯にしよう、と部屋を出る。この寄宿舎の生活音はそれなりに私に親しい。



天気がいい夕暮れ時は、4 階の廊下は夕焼けが差し込んできれいに映える。寄宿舎のなかで、私が特に好きな場所だ。

三階談話室

D.Y.（新領域創成科学研究科、2023 年入舎）

「ここ、使ってもいいんですか？」

入舎して数日後、三階談話室を使い始めたときのことを、今もよく覚えている。人生初めての寄宿舎生活、真面目で優秀そうなクリスチャン学生たちに囲まれた生活の始まり。私は期待と緊張で興奮し、気持ちが高ぶってしまって、入舎してしばらくは、いつも落ち着かなかった。最近は早天祈祷会や木曜集会を行っている、この三階談話室も、当時は舎生の自習スペースとして使っていた。四つ並べられた長机のうち、入り口側の二つの席は既に使われていたが、残り二つの窓際の席は空いていた。居住空間の中に、他人と一緒に勉強に打ち込める自習スペースがあるということに私は大喜びし、他の新舎生にとられる前に、と入舎してすぐさま、窓際の席を陣取った。新しい大学院生活、そして、私の YMCA 寄宿舎生活は、この一言と共に、談話室にて幕を開けたのである。

午前中は談話室で課題や研究作業をし、研究室に行き、そして夜、再び談話室に戻ってまた作業をし…。実家通いであったこれまでと比べ、通学時間が大幅に減った分、勉強にかけられる時間が驚くほど増えた。私は寄宿舎にいる時間の多くを談話室で過ごし、勉学に邁進した。そしてそんな生活の中で特に、談話室メンバーとの交流は、かけがえのない日常の一部となっていった。以前から談話室の住人であった当時の学生主事や、時期を同じくして新たな談話室の住人となった新舎生とは、毎日のように、学校で経験した面白い話や、研究における苦労や悩みなどを分かち合い、励まし合いながら(というよりは、聞いてもらい、助けてもらいながら)、共に時間を過ごした。また、キリスト教についてほとんど無知に等しかった私は、聖書の内容や信仰、祈りについて多くの話を聞き、日曜日には、近所のさまざまな教会に連れて行ってもらった。大学ではずっと疎外感を抱いていた分なおさら、信頼できる兄と弟が増えたような心持ちがして、毎日が楽しく、新鮮で、充実したものであった。

談話室の本棚には、聖書や讃美歌だけでなく、過去の早祷ノートがたくさん並んでいる。私は時間があれば、好んでそれらの早祷ノートを遡って読んだ。そこには、かつて舎に居た人たちが、どのように日々を送り、何を考え、信仰にどう向き合っていたのか、その思考の断片が書き残されていた。人の日記をのぞき読んでいるような感覚がして、ひどく面白く、また、翻って自分はどうかと思い巡らせながら、信仰について考えたりもしていた。

それから二年半以上が経つ。談話室の友はみな舎を去り、他方、私は今も入舎当初と同じ窓際の席に座って、この文章をしたためている。

思い返せば、この二年半は想像もしていなかったほど濃密で、体当たりで人と関わる経験を積んだ。他者から受け取る愛と、共に生きる喜び。あるいは、自分とは異なる考えをもつ

他者との衝突と、それぞれが負う傷つきや悲しみ。互いに認め合い、許し合い、自分を偽らずに在れるこの環境の中で、多様な他者との関わり方を、私は少しずつ学んできたのだと思う。そして何より強く自覚するようになったのは、独りでは到底知りえなかった自分の姿、どうしようもなく自分を優先してしまう、自分の弱さである。相手のため、と思ってした行為さえ、振り返れば実は単なる自己保身だったと、後で気づいたことも多くある。いとも簡単に口にされる「他者を愛する」という行為は、表面的な優しさとは全く別のものであり、私にとって決して容易なものではなかった。

今、また、幾度となく眺めてきた窓の外の風景を前に、自らの変化と、なおこれからも続いていくこの問いについて、キリスト者となった私は静かに思い巡らせている。



舎生部屋

鎌田　将（人文社会系研究科、2025 年入舎）



半世紀もの間、数多の先輩方を見守ってきたこの建物。竣工 50 周年という記念すべき年に、その歴史の一部としてこの部屋で日々を紡げることに、深い縁と喜びを感じています。私の部屋は、単に眠る場所を超えて、友人とのつながりを感じられる温かな空間です。

私の部屋を見渡すと、友人や舎生から譲り受けたものが数多くあります。今、私が毎日向かっている机と椅子は卒業した友人から譲り受けたものであり、窓辺にかかったカーテンもまた、舎生からゆずってもらったものです。自分一人では完成しなかったこの部屋が、多くの方々の厚意によって形作られている事実に、日々感謝が絶えません。

また、この建物の造りも、独特の味わいがあります。廊下の音が筒抜けで、ちょうどこれから寝ようとしていると急に笑い声が聞こえてくるなど、困ることもありますが、そのにぎやかさが友とともに生きているという安心感を与えてくれます。住人同士がプライバシーの名のもとに隔離された現代の住宅では決して味わえない、人と人との距離の近さが生むこの活気こそが、本寄宿舎が 50 年保ち続けてきた魅力だと実感しています。

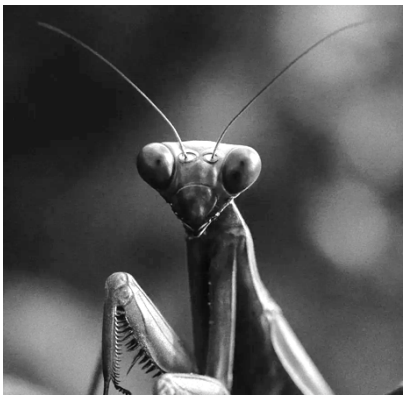
50 年という長い歳月、この壁や床はどれほどの舎生の門出を見守ってきたのでしょうか。私もまた、先達から受け取ったこの温かな空間を大切に育み、次にこの部屋に住まう未来の舎生へと、誇りを持ってこのバトンを繋いでいく決意です。





卓球室

桐生　有喜（教養学部、2024 年入舎）



東大 YMCA に入舎してから約 13 か月が経った。僕の入舎前は舎内で定期的に卓球トーナメントが開かれ、舎生同士で気軽にラリーを楽しめる環境があったと聞いている。だが現在は定期開催はなく、不定期に数人で集まって遊ぶ程度になってしまった。僕自身は中高の 6 年間卓球を続け、技量はともかく競技としても娯楽としても卓球が好きだった。大学に入ってからも卓パというサークルに入っていたが、次第に学業や他の用事で卓球に割ける時間は減り、入舎したころには数か月まったくラケットを握らない期間ができていた。

熱が完全に冷めたわけではなく、近くに台があるというのは思いがけない幸運だった。入舎して最初の一か月は気ままに一人で球を打っていた。一人練習も悪くはないが、やはり相手がいてラリーを続ける楽しさには及ばず、どこか物足りなさを感じていた。その後、数名の舎生から「卓球やろう」という声が上がり、約半年ぶりにまとまった人数でプレイする機会が訪れた。

久しぶりの対人プレイは期待以上に楽しかった。ラリーの合間に交わす雑談や駆け引きの中で、普段の会話では見えない舎生それぞれの一面が垣間見えた。集中してボールを追う瞬間や、失点して苦笑いする表情、小さな勝利に沸く声―そうした些細なやり取りが共同生活の空気を柔らかくし、居心地の良さを増してくれた。定期的な大会がなくなったのは残念だが、不定期でも集まってプレイすることで新しいつながりが生まれ、卓球は僕にとって単なる運動以上の意味を持ち続けていると改めて感じた。今後も時間を見つけてラケットを握り、舎生と卓球を通じて交流を続けていきたい。



図書室

神野　和磨（理学系研究科、2025 年入舎）



まかないの小幡さんとの一枚

階段を 4 階に上がると、正面にあるのが図書室です。図書室には、これまで東大 YMCA 寄宿舎が収集してきた書籍や、卒舎生諸兄姉の皆様が執筆された書籍が所蔵されるとともに、三階談話室と並んで舎生の勉強場所の一つとなっています。部屋には本棚の他に、六角テーブルが 2 台と木椅子、Canon の印刷機が一台設置されています。夜になると図書室の部屋から明かりがこぼれ、その前を通ると、机に向かう舎生の背中が目に入ります。

2025 年 12 月現在、ざっと数えたところ蔵書の数は 4000 冊を越えます。この図書館には、その部屋の広さに比して実に多様な分野の本が収蔵されています。聖書、神学書、信仰に関する書、外国語文献、比較宗教論、倫理学、古典、書簡・日記・回想録、世界史・日本史、法思想史・憲政史、政治経済学・行政学、自然科学史・科学思想史、数学、生物学、医学、百科事典、演劇論・音楽論、小説、新書など多岐に渡ります。

これらの書籍が並ぶ本棚は、この寄宿舎に入れ替わり立ち代わり滞在してきた舎生たちの、知的好奇心、知的格闘、思索、省察が、130 年以上の歳月をかけて積み重なってきた地層のようです。言語・分野を問わず、キリスト教その他の諸宗教に関する書籍が所蔵される様は、小さな知恵の館を思わせます。

これだけの蔵書を長年にわたり維持・整理されてきた舎生の方々、ならびに事務局の皆様のご尽力に、感謝申し上げます。



客室

W.H.（学際情報学府、2023 年入舎）

来月から、事務局が家族や YMCA 関係者以外を客室に入れない方針にするという噂を聞いたが、どうもその決定に至るには、私の行動も少なからず関係しているのではないかと思っている。

これまで私は、洋室・和室・ゲストルームに、いろいろな友人を迎えてきた。洋室には、私の教会の先生が一時期月に一度ほど利用していた。京都時代に通っている教会が、私の東下りとともに東京に分点を設け、日曜の朝礼拝堂を借りている。そのため、教会の方々が時々洋室を借りることがある。

舎生自身が客室で泊まることは普通ないが、私は LA の学会から戻った時にラボメンバーの中で流行っていたコロナに感染してしまい、洋室で隔離生活をした。体の発熱と夏の暑さに蒸され、曖昧な記憶だ。

その次の夏、和室でアメリカで留学している中高の友人と博士進学と失敗した恋愛の話をした。卒業後は全く違うところで全く違う人生を歩んでいたが、なんとなく今もまた、人生の同じところに辿り着いていた。

バイト先の本屋で拾った野宿しそうな観光客 2 人を和室に入れたこともあった。初対面の人を家に連れてくるのは普通ではないと思うが、異郷で出会った同い年の同郷人への憐れみだったのか、象牙の塔に生きてきた私が中国の田舎で塾講師をしている 2 人の純粋なエネルギーに心を打たれたのか、なんとなく助けてあげたかった。このことを知っているのは、たぶん今フランスにいる元舎生の一人だけ。

地塩寮の客室に安くて泊まらせてもらってるお礼に、京大 Y の方もゲストルームを安く泊まってもらっている。地塩寮の客室に猫が出るけど、ゲストルームに何が出るんだろう。

今日もまた一人、夜行バスで来た友人をゲストルームに迎えた。京都時代の友人はみんな苦学生で、いつも一番安いゲストルームを利用している。去年ゲストルームで泊まっていた友人に今年もクリスマスカードを送ろう。

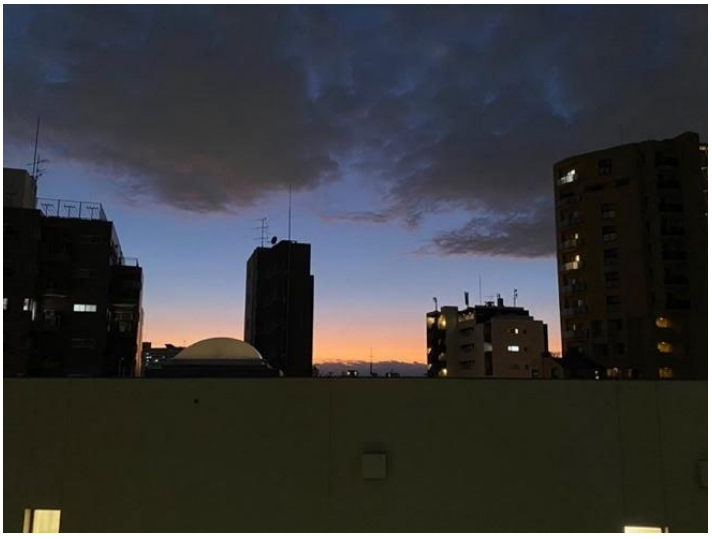
客室はもともと OB/OG と学 Y の方々のために用意されたものなので、こうした方針になるのも仕方ないと思う。たしかに私は友達を入れすぎて寄宿舎に負担をかけたかも。それに事前の予約ではなく急なお願いになることも多い。でもなんとなく、知り合った人をこの舎の客室に泊まらせたいという気持ちが強くある。「隣人」とは何か、クリスチャンにとって人生をかけて解いていく言葉かもしれない。

3 階・4 階ベランダ

M.M（経済学研究科、2025 年入舎）

3 階の住民である私にとって「3 階ベランダ」といえば卓球室から入って洗濯物を干す場所、という印象だろうか。ただ、入舎時にベテラン舎生から洗濯物を干すと風で飛んでいくと言われてから恐ろしくて布団カバー以外干せていない。布団カバーは洗濯ばさみでこれでもかと厳重に挟んで飛ばないようにしている。また、窓がなぜか自然と閉まるようになっており、ベランダに出ると外に締め出されてしまう。なので夜に干そうとすると暗さも相まって余計怖い。

「4 階ベランダ」は 4 階の舎生が洗濯物を干す場所である。しかし、私にとっては夕焼けスポットだ。私は夕暮れ時のマジックアワーが 3 度の飯より好きで、見るたびに見惚れて立ち尽くしてしまう(自分で言うのもなんだが安上がりな趣味である)。そんな私にとって夕焼けが綺麗に見えるスポットは大事な居場所である。夕焼けハンターの私は 4 月に上京してきた時から、さながら餌を求めるハイエナのように寄宿舎周辺の夕焼けスポットを探し回っていた。が、まさに灯台下暗し。探し回っていた私が求めていた特等席は、なんと自分の住む寄宿舎にあったのだ。最近は、自分の部屋から少しだけ見える西の空が綺麗なとき、急いで 4 階ベランダに向かう。そこになぜか置いてある椅子に座って繊細なグラデーションを眺めると 1 日の嫌なことを忘れてしまう。4 階ベランダが私の夕焼けライフを彩ってくれている。



4 階ベランダからの夕焼け. 12 月 18 日 17:04 撮影
(青とオレンジが混ざる瞬間がたまらなく美しい)

祈祷室

崔　民赫（法学政治学研究科、2021 年入舎）



今の東大YMCA の会館には、祈祷室がある。以前は、4 階の風呂場の前にあったらしいが、いまは、ベランダの扉のすぐ前の北向きの部屋が祈祷室になっている。

私が入舎した 2021 年 4 月頃には、祈祷室は、既に退舎した舎生たちが書いた祈り課題のポストイットなど、活発に使われていた痕跡はあったが、だいぶ放置されていた。コロナ禍の影響で舎生が 10 人前後しかいなくなっていたこともあると思う。そこで、せっかくの祈祷室を活用したいと思い、大掃除をし、きれいなカーテンを窓につけ、いまのような感じに整えた。

この祈祷室では、舎生たちとともに祈り会を行ったことも何度かあるが、大切な思い出である。また個人的にもこの祈祷室がすごく気に入ったので、よく祈りや、静かに黙想する場所として使わせていただいた。これらすべて東大 YMCA に入舎できたから得られた経験であった。

人間は遙か古代から祈っていたようである。そして、キリスト教は、ほんとうに素晴らしい祈り方を人間に示している。

YMCA の舎のコミュニティは、人間の理性では知り得ないところから来る恵みに感謝し、互いのことを思い、大事にする舎生たちの祈りによって支えられているのだと私は信じている。そして、舎に連なる方々の祈りが、舎生の祈りを支えていることも忘れてはならないのだと思う。私は祈祷室が人間の「祈り」ということを大事にしている点で、これからも大切にされてほしいと願っている。



3-4 関係の方々の声

東大 YMCA 事務局の変遷

事務局　　明神恵子　永田智子

1975 年 4 月新舎に本部事務所が移されてから、当時専務理事となられた馬場進さんがご自分の会社におられた加藤せつさんを事務局員として雇用されました。以来、加藤さんは 31 年の間、事務局の事務的な仕事から舎生の母親代わりとなるようなお世話まで、多岐にわたることを一人でこなされてきました。子供がいなかった加藤さんは時にはご自宅に舎生を呼んでご馳走されたこともあると伺いました。2005 年頃から体調を崩され、入院されるようになり、2006 年 4 月に岩井理事のご紹介で明神恵子が事務局に入りました。加藤さんからの引継ぎもままならないまま、当時の常務理事でおられた野口吉三郎さんのご指導の下、事務局の仕事を始めましたが、当初から他の職場と掛け持ちで、週 2 回の勤務でしたので、仕事量の多さにいっぱいいっぱいだったことを鮮明に記憶しています。2011 年度には次年度から公益財団法人に移行すべく、当時の常務理事だった長島章さんと必死に申請書類を作成し、2012 年 4 月から公益財団法人として発足できました。2022 年 4 月に篠原常務理事の実妹である永田智子が事務局に入り、明神と週 2 日ずつ勤務しています。

事務局では、会費・経費・会員名簿の管理、公益財団法人としての東京都への年次報告等の事務的な仕事を行いながら、舎生の生活や活動が順調にいくよう見守っています。

東大 YMCA 事務局回想

桃井明男

私は、当時財団の理事長をされていました原田明夫さんから暫くぶりに電話をもらい「今、何をしていますか？」と声を掛けられ、「時間があれば少し相談したいことがあるので一度会って話をしましょう」ということになりました。それは、2015 年 5 月のことでした。

後日、お会いして話を聞きますと「東大 YMCA の常務理事をしている長島章さんという方の健康状態が芳しくなく、後任の常務理事を探す努力をしてきたのだが、短期的には難しいということになり困っている。当分の間、私が止む無く常務理事を兼任することとなり、ついては、事務局を強化する必要性があるので見つかるまでの間、私に時間の許す範囲でよいから事務局の手伝いをお願いできないか」という相談でした。

原田さんとは、私が東京女子大学の事務局長をしていたときに大学の理事長として就任されて以来、そのほとんどの期間、補佐をしていました。奥様の朋子夫人も女子大の卒業生ということでお二人とは親しい関係でした。また、東京キリスト教青年会（東京 YMCA）で奉職していたときには、東大 YMCA の OB の多くの方々とも馴染みがあり、無下に断れないのでお役に立つならお引き受けしましょうということになりました。

後日、原田さんと一緒に事務所に行って、長島さんと事務局の明神さんにお会いして仕事内容の説明を受け、対外的なこともあるので「事務局長」という形でお願いされました。そして、今まで常務理事が行っていた大部分の実務を私が担い、寮母的存在の明神さんと料理上手な賄いの片桐さん、月に一度会計の入力補助をしてくれている津崎さんの四人で、法人業務と基幹事業の寄宿舎を切り盛りすることになりました。明神さんは、他の仕事と掛け持ちしていて週 2 日（火・木)の勤務、私が大学や他団体の仕事をやりくりして週 3 日（月・水・木）事務所に顔を出すことになりました。曜日が重なる木曜日は、明神さんと一緒に夜 7 時から 9 時過ぎまでの合同祈祷会、聖書研究会、OB 座談会に出席しました。これは、舎生の一人一人と交わりその人を知る良い機会となりました。当時、聖学院の学長をされていました阿久戸光春先生の聖研は、先生も準備に力が籠っていて舎生も熱心に事前勉強をして濃密な時間を共に過ごしました。

また、明神さんも私も一人の日は、様々な雑務をこなさなければならず、老朽化に伴う施設のトラブル、舎生どうしのいざこざが起きたときには学生主事の相談相手になったりしました。特に大変だったのは 2019 年からのコロナ禍でした。が、個々の隔離状態にある中でも罹患した舎生のために食事を部屋の前まで届けたり下げたりして助け合い、何とか協力しあってこれを乗り切りました。

一方、法人業務は公益法人改革により 2011 年 4 月に公益財団法人になって 3 年目を迎えた時でしたので、主務官庁（東京都）による第 1 回目の立ち入り検査があり、さらには、2 回目

となる 3 年毎の東京都の立ち入り検査がありました。この時には、厳しい改善指摘事項があり、その対応に苦慮したことを思い出します。

しかし、このことがあって忘れられたかのようになっていた理事長の常務理事兼務のことで改善指導があり、これを解消し選任しなければならなくなりました。

私は、ようやく退く機会が来たと心底喜びました。というのも、2022 年 6 月に事務局を退く迄の 7 年間、原田理事長が 2017 年 4 月 6 日に病気で天に召され、その後、急遽徳久俊彦理事が理事長（常務理事兼務）を引継がれたりした関係で常務理事の選任は後回しなり、事務局長が実務をこなす状態が長く続いていたからです。

これを機に月本昭男氏が理事長に就任、篠原常務理事そして岩見理事の三人体制となり、事務局も明神さんと新たに篠原理事の実妹の永田さん、それに会計補助の津崎さんと健康を害し退職した賄いの片桐さんに代わって小幡さんが加わった新しい事務局体制が敷かれました。

調理師の声

調理師　小幡公雄

50 周年おめでとうございます。私はこの寄宿舎でまかないを作っています小幡と申します。2023 年の 4 月からお世話になっております。こちらに来る前は某社員食堂で勤務しておりました。寄宿舎での仕事は、これまでの職場と大きく違いました。予算の範囲内ではありますがメニューを自由に作ることができ、またそれぞれの学生の好き嫌いに応じてメニューを変えることができます。留学生たちの出身地域の料理を作ることもあります。何より学生から食べた感想を直接聞くことができるのが嬉しいです。

途中骨折による休職も挟みましたが、これまで 2 年余りこちらで働かせていただいて、ようやく舎生たちも打ち解けて接してくれるようになり、毎日こちらに来るのが楽しみになっています。食事関連は問題が多くまだまだ課題もありますが、学生たちには楽しい寄宿舎生活を送ってもらいたいと思います。

（編集：　米倉 敬宏）